



文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官

豊口 和士

これからの書写・書道教育 (14)

平成29年3月に小学校・中学校、平成30年3月に高等学校の学習指導要領が改訂・告示され、令和2年4月の小学校、令和3年4月の中学校に続き、令和4年4月には高等学校でも年次進行で完全実施されることとなります。

今次の改訂では、全ての教科・科目において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理し直すとともに、各教科等の学びについて「何ができようようになるか」、そのために「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」という視点を重視しています。また、学習評価の改善について、小・中学校に続き、高等学校でも『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料』がまとめられました。

本連載では、今次改訂を踏まえた、これからの書写・書道教育について紹介していきます。

今回は、前々回で確認した「文字文化」の視点を踏まえて、書写・書道を含む書全般について文化の側面から私見を述べてみたいと思います。

二 日本の文化としての書

① 伝統的な日本の文化の例

日本には、長きにわたり今日まで継承されてきた多様な文化があります。まずは、伝統的な日本の文化の代表的なものについて見てみましょう。

「もてなし」の心へと昇華し、「作法」として確立したものが茶の湯であると考えられます。

能や歌舞伎もまた日本を代表する文化として育まれてきたものです。

能は「様式」にまで昇華された身体性を根幹として、「幽玄」という理念、その美の世界をおよそ沈黙により表現します。また、歌舞伎は大衆の娯楽として生まれた舞台演劇であるため、エンターテイメントとしての色彩が強く、台詞を発する口調や身体の動きには観客に直接働きかける効果や演出が強く表れますが、口調や身体性には役者の個性に基づき確立された「型」があり、それが家として継承され、さらに継承した役者の個性により新たに型が確立されていきます。型は役者の表現世界を形作る要素となっており、訓練の成果としての技術面での上手い下手を越えたところで機能し、観客は役者それぞれの型と、型を通して発せられる役者の個性やエネルギーを味わっているのだらうと思われま

す。ここでは、禅の精神を「侘び・寂び」や人間関係にお

ける「侘び・寂び」や人間関係にお

文化とされるものの例には共通する点があるようにも思われます。それは、仮に他者を意識して表現がなされているとしても、そこでの表現そのものが表現する対象ではないということです。つまり、表現における手段となる技術は確かに必要であり、その習熟のためには訓練や修行といった過程が必要なのは明らかですが、訓練や修行によって獲得した技術が表現の対象なのではなく、それらに裏打ちされて昇華された「様式」によって生み出される表現世界、美の世界こそが表現の対象なのであり、伝統的な日本の文化は、そこに美が見出され、その美の世界を味わうことが社会で共有されることで、今日まで育まれ継承され続けてきたのであろうと考えられます。

こうした伝統的な日本の文化は、日本の社会全体で共有されてはいるものの、特別な才に恵まれた人等によって担われ、その中で「作法」や「型」といった様式が継承され、訓練や修行により獲得された卓越した技術によって表現される世界を、社

会全体で鑑賞したり時に体験したりすることで味わわれます。社会でのこうした共有の仕方では継承されてきたものは、芸術文化、芸能文化と捉えることができるでしょう。

②生活文化としての書の文化

では、書写・書道を含めた書はどのように捉えられるでしょうか。文化の視点から捉えれば、文字を書く活動、書かれた文字という我々の日常的な生活の中に美が見出され、それが尊重され、育まれ、継承されてきたという経緯があります。明治以降、自己表現や美の表現へとといった芸術としての特別な表現活動としての新たな側面も強くなりますが、今なお生活の中に見出される美を尊び、生活を楽しみ豊かにするという、生活に根ざした文化としての側面は失われてはいません。

学習指導要領解説に示された「文字そのものの文化」はまさにこの両側面の体系的なつながりの中で形作られ、「書くことの文化」はおよそ生活文化として継承されてきた側面を指していると考えられます。

③書写・書道

国語科の書写と芸術科書道は、その根底で、生活の中に美を見出し尊重する生活文化の考え方や意識によって貫かれ、両者での学びが体系付けられているといえます。国語科の書写の学びでは、文字や言葉を書く上で、生活に生かせる知識や技能を身に付けるだけでなく、言語文化・文字文化の視点から書の伝統にも触れることで、「書いて伝える」ということに関わる生活文化としての書の意味や価値に気付き、また、そこに見出され育まれてきた美の世界を感受することにもつながる「芸術文化」として文字や書捉える上での価値観や美意識の素養も自然と培われています。

また、芸術科書道では、書に表出する美を味わい捉え表現することに体験的に取り組み、必要な知識や技能を身に付けながら、社会との関わりも見据えて自己表現や美を表現することの意味や価値について考えることや、生活文化の中で見出されてきた美を伝統として体系的に捉え理解を深めながら、書の美を介して書や文字の伝統と文化への理解を深め、書の美に対する感性と、それを基盤として社会全般の様々な事象等に対する感性、特にそこで働かせる美意識ともいべき見方・考え方を身に付けることが目指されます。

書の世界が書の美を構成する様々な要素を細分化し分化してきたことも事実ですが、言語文化・文字文化の視点から言葉や文字と真摯まことしくに向き合い、書の伝統と文化が時代に応じて変化しながら継承され続けていくことが大切であると考えます。

書写や書道を学ぶことを通して、文字を書く技術を身に付けるとともに、文字や言葉の働きや書いて伝えることの意味や価値について自ら考え、感じ取る力を身に付けてほしいと思います。